

こころころ平成 31 年度あいさつ

多職種協働の大切さ

この度、新しい元号「令和」を迎えるにあたり、改めて身の引き締まる思いがします。様々な課題が精神保健医療福祉の分野にはありますが、少しでも良い方向に改善するよう職員が一丸となって取り組んで参ります。

さて この精神保健医療福祉の分野ではご存知のように様々な職種があります。当院においても、現在、常勤の精神科医師 16 名、看護師 145 名、精神保健福祉士 10 名、心理士 6 名、作業療法士 12 名、薬剤師 3 名、栄養士 2 名、放射線技師 1 名そして臨床検査技師 3 名等の職種が勤務しています。「チーム医療」の必要性が叫ばれてから久しいですが、これは、「医療機関において、1 人の方を支援するために、多職種が連携・協働して支援を行う医療」を意味します。感染症などの急性期疾患で多くの方が病院で亡くなっていた時代には、病院での診療が主であり、医師をリーダーとするチーム医療で完結していましたが、がん、脳卒中、虚血性心疾患、そして糖尿病などの慢性疾患が増えてくる中で、疾患を抱えながら地域で生活することが多くなってきました。そこには日常的なケアが必要となり、医師だけの意見や視点だけでは対応が困難となってきました。勿論、こころの病も例外ではありません。病院のみならず地域社会で過ごしていくためには、一人ひとりの生活が重視され、それぞれが「より良く生きる」ことを支援していくためには多職種での協働が必要となります。

よくある話として、忙しく見える医師には言えないことも診察後に看護師や心理士に話をし、日常生活、障害年金や制度上で困った時には精神保健福祉士に相談し、そして薬の副作用が心配なら薬剤師といった具合です。相談を受けた各職種が必要に応じて電子カルテ上でその大切な情報を共有することで、結果的に担当医師にも伝わります。「自動車運転免許がとれた」「作業所に行くことができた」そして「デイケアに参加した」といったうれしい話が伝わってきます。時には、「家族のように大切にしていた犬が老衰で亡くなった」ということを知り、次の診察を迎えることもあります。訪問の看護師が実際に自宅を訪問したことで自宅での様子が分かり、その方の悩みが解決する方向に向かったことや、しばらく病院に来ていなかった方が精神的に調子を崩していることがわかり速やかに入院につなげることもできました。1 人の医師では困難なことでも多職種でならよりよく対応することが可能となるのです。

このような多職種協働の作業は専門の資格を取っただけですぐにできるのではなく、日々の努力と研鑽が必要です。理想的な多職種協働は、職員が互いに協働することで、さらにその能力を高め成長していくものです。こうしたチームアプローチを支えている 5 つの要素があります。①横の人間関係、②互いに学び合える雰囲気、③自らの専門職への自信と他専門職への敬意、④誰のため、誰のニーズを満たすために、私たちはがんばっているのか、という原点に立ってみること、そして⑤チームの他職種を心理的に支えることです。

引き続き県民の皆さんのより良いこころの健康をめざして、多職種で取り組んでまいりますので、今後ともよろしくお願い致します。